

**「我が国における牛海綿状脳症
(BSE)対策に係る食品健康影響
評価」のポイントについて**

平成17年5月

内閣府食品安全委員会事務局

どのような評価を依頼されたのか

- いつ？ 平成16年10月15日

- 誰から誰に？

厚生労働大臣

食品安全委員会委員長

農林水産大臣

- どのようなことについて？

- (1) と畜場におけるBSE検査の検査対象月齢の改正と検査技術の研究開発推進
- (2) 特定危険部位(SRM)の除去の徹底
- (3) 飼料規制の実効性確保の強化
- (4) BSEに関する調査研究の一層の推進

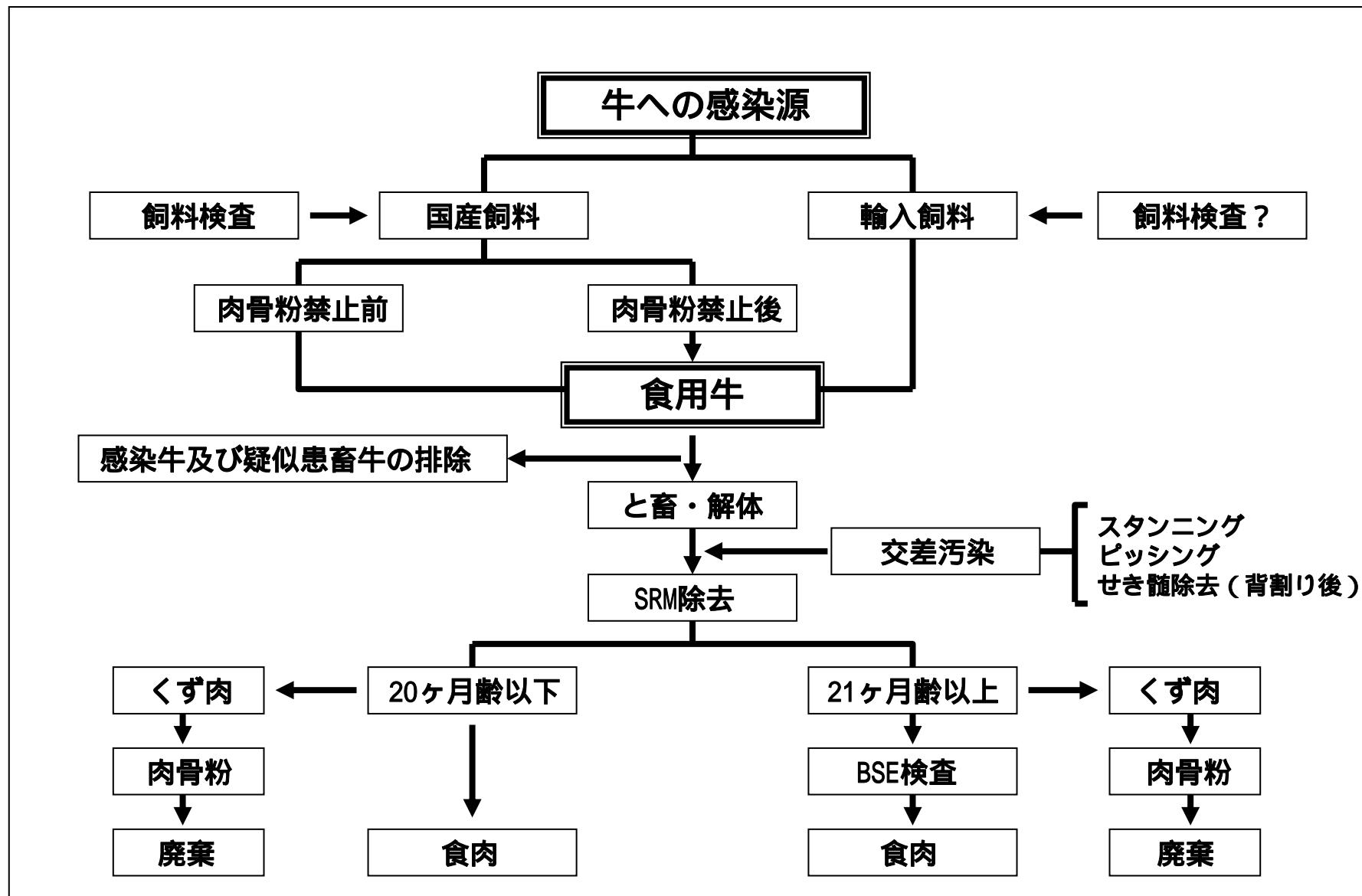
どのように評価は進められてきたか

- H16/10/15 厚生労働省、農林水産省より評価依頼
(諮問)
- H16/10/21 食品安全委員会、プリオン専門調査会
に調査審議を求める
- H16/10/26 プリオン専門調査会で調査審議
~ H17/3/28 (専門調査会を8回開催)
- H17/3/31 食品安全委員会、評価結果に対する
意見・情報の募集を決定(4/27まで)
- H17/5/6 第93回食品安全委員会において、プリオン
専門調査会の調査審議結果が報告され、委員会
で了承。
同日、厚生労働省、農林水産省に評価
結果を通知(答申)。

どのような考え方で調査審議を進めたか

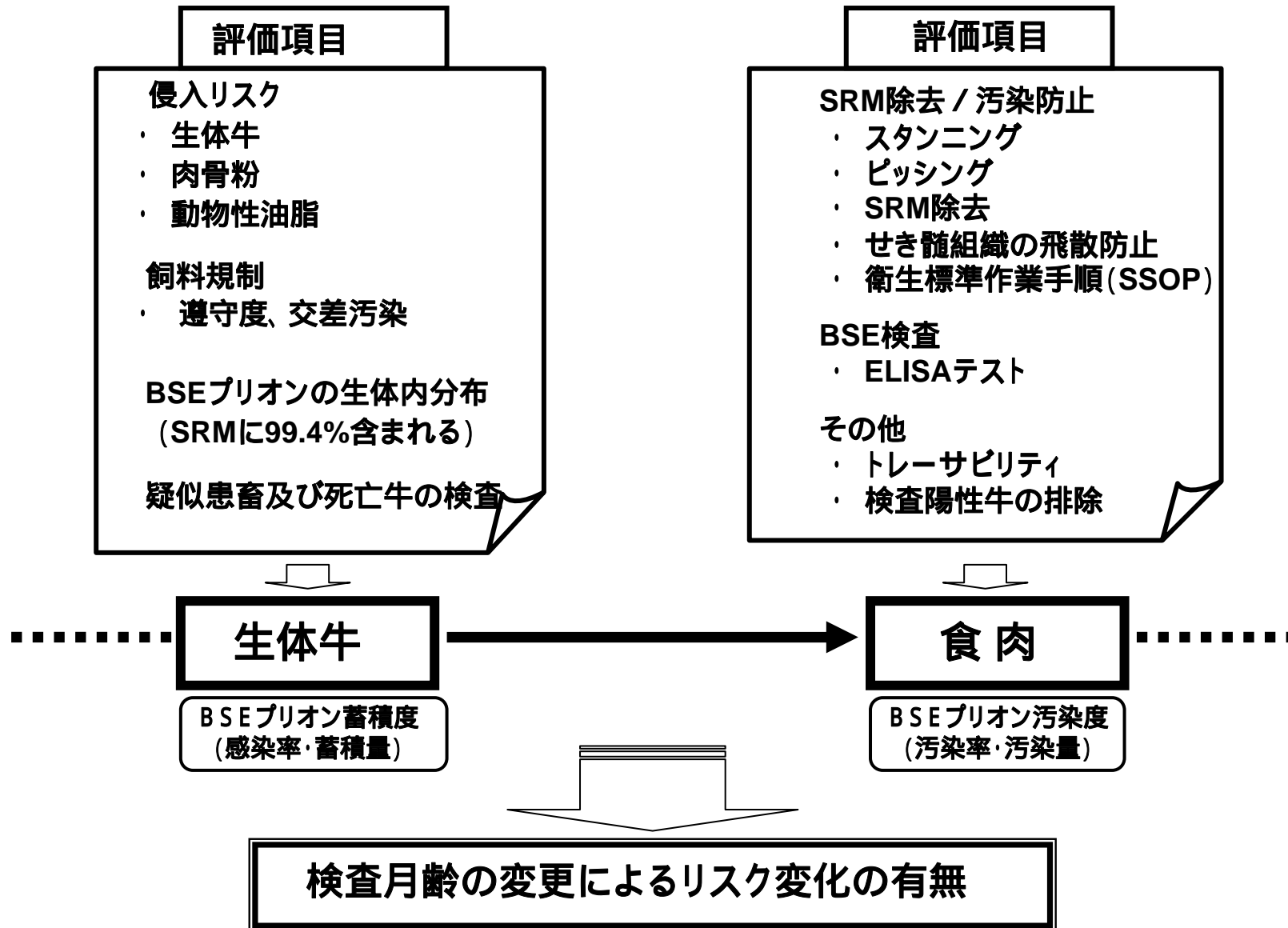
- 検査対象月齢見直し 2003/7以降生まれの牛についてリスク評価。
- 月齢見直しによるリスク変動 定性的、定量的評価の2通りを試みる。
- 定量的評価 モデルを作成して検討。評価の限界などを明記し、数字の一人歩きを避ける。
- リスク評価結果は見解にまとめ、複数併記もあり得る。
- リスクコミュニケーションで提起された問題点を検討し、見解に反映させるよう努力する。

牛・食肉へのBSEプリオンの汚染ルート(モデル)



* P.8 図1:リスク評価に関する基本的考え方(モデル) 食肉へのBSEプリオンの流れ図 より

何をどのように評価したのか



定性的に見てみるとどうか

月齢(2005.3現在) 出生年月		0～20ヶ月齢 2003.7.1～生まれ	
		全頭検査	21ヶ月以上の検査
生体牛におけるBSEプリオンの蓄積度(感染率、蓄積量)	・侵入リスク 生体牛、肉骨粉、動物性油脂	無視できる	無視できる
	・国産飼料規制 遵守度、交差汚染 ・輸入配混合飼料	無視できる～非常に低い 不明	無視できる～非常に低い 不明
	・BSEプリオンの蓄積度 感染率 蓄積量*	非常に低い 少ない	非常に低い 少ない
	・疑似患畜の検査	検査陽性牛は検出なし	検査陽性牛は検出なし
	・24ヶ月以上の死亡牛検査	無視できる(死亡牛は焼却され、レンダリングに回らない)	無視できる(死亡牛は焼却され、レンダリングに回らない)
食肉へのBSEプリオン汚染度(汚染率、汚染量)	・SRM除去/汚染防止 スタンニング ピッシング SRM除去 せき髄組織の飛散防止 衛生標準手順作業書(SSOP)	非常に低い～低い 非常に低い～低い 非常に低い 非常に低い 低い	非常に低い～低い 非常に低い～低い 非常に低い 非常に低い 低い
	・と畜検査(ELISAテスト) 検査陽性率 汚染量*	非常に低い 無視できる～非常に少ない	20ヶ月齢以下は検査しない 無視できる～非常に少ない
	・その他 トレーサビリティ 検査陽性牛の排除	無視できる 無視できる	無視できる 無視できる

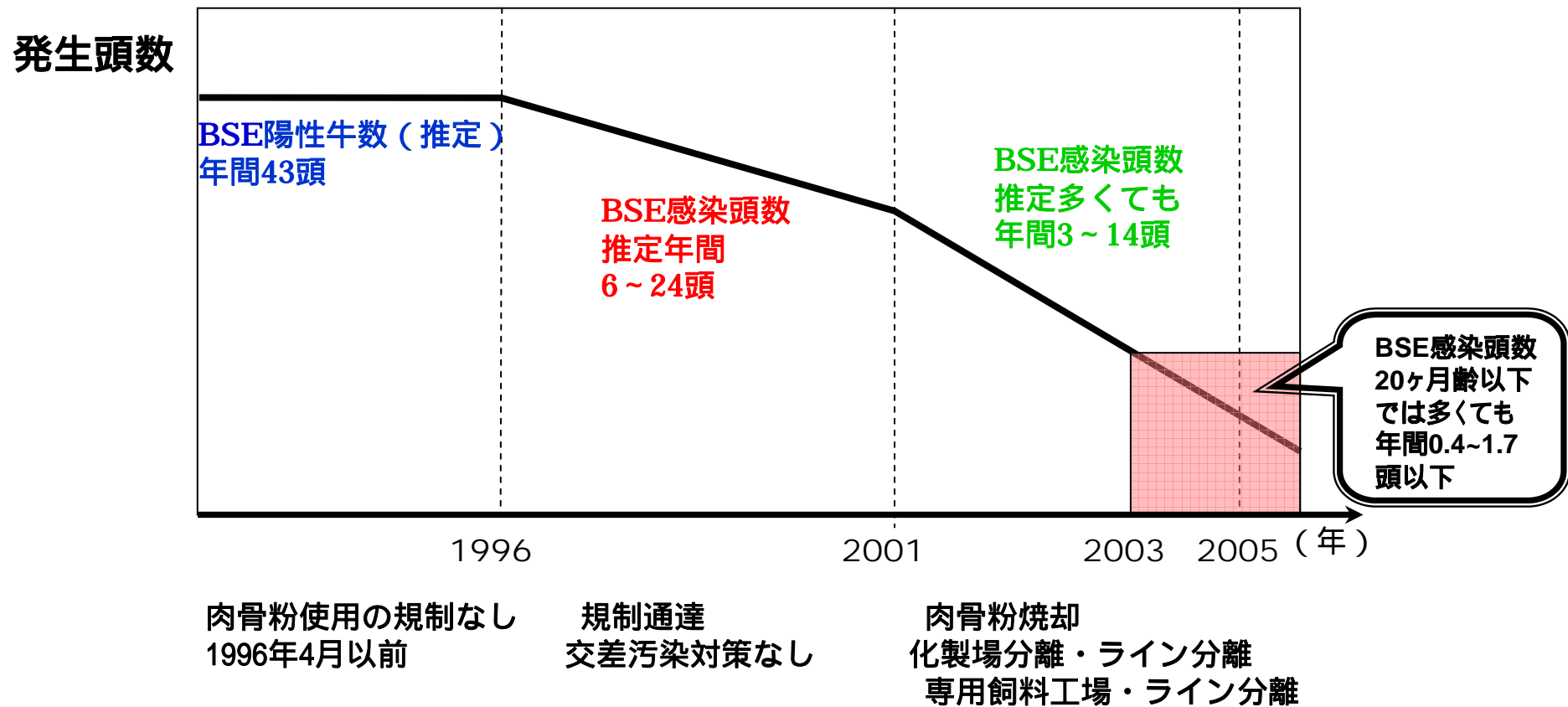
* P.16 表1 BSE対策の有効性を踏まえたBSEプリオンの生体牛における蓄積度と食肉への汚染度評価 より

定量的に見てみるとどうか

月齢(2005年3月現在) 出生月	0~20ヶ月齢 2003.7.~生まれ	
	全頭検査	21ヶ月齢以上を検査
ELISAテスト	あり	0~20ヶ月齢は検査しない
感染牛 ・感染率 ・プリオン蓄積量	・年間0.4~1.7頭以下 ・検出限界程度 (マウス脳内接種で1ID ₅₀)	・年間0.4~1.7頭以下 ・検出限界程度 (マウス脳内接種で1ID ₅₀)
陽性牛 ・検出率 ・プリオン蓄積量	・3歳未満で年間0.008~0.036 (日本のデータの場合0.3~1.5)頭 以下。20ヶ月齢以下ではさら に少なくなる ・検出限界程度 (マウス脳内接種で1ID ₅₀)	0~20ヶ月齢は検査しない
食肉へのBSEプリオン汚染 ・汚染率 ・汚染量	・せき髄組織片の残存20%、 枝肉洗浄により10分の1に減少 ・検出限界程度 (マウス脳内接種で1ID ₅₀)	・せき髄組織片の残存20%、 枝肉洗浄により10分の1に減少 ・検出限界程度 (マウス脳内接種で1ID ₅₀)

* P.27 定量的リスク評価による検査月齢見直しに関する見解 より

BSE発生頭数はどう変化しているか(イメージ)



議論をまとめるとどうなるか

結論(1)

- 検査対象月齢の見直し

検査月齢の線引きがもたらす人に対する食品健康影響(リスク)は、あったとしても非常に低いレベルの増加にとどまると判断される。

結論(2)

- SRM除去の徹底

- √CJDリスク低減に寄与する重要な対策。

- ・ピッシングの中止に向けて具体的な目標を設定し、できる限り速やかに進めることが必要。

- ・せき髄組織の飛散防止、衛生標準作業手順(SSOP)の遵守を徹底

結論(3)

- 飼料規制の実効性確保の強化

輸入配混合飼料の原料の届け出はリスク低減に有効。

検査・指導体制の強化は規制の有効性検証のために重要。具体的目標を設定し、できる限り早く達成することが必要。

結論(4)

- 調査研究の一層の推進

より感度の高い検査方法の開発

検体の採材、輸送、保管等に配慮

リスク回避措置の有効性評価方法の開発

BSEプリオンたん白質の蓄積メカニズムの
解明

リスク評価に必要なデータ作成のための研
究

おわりに

- 今後、留意すべき点を記載(批判的意見)
 - ・検査月齢の見直しは、新たな飼料対策、SRM除去対策の実効性が確認された後に行うのが合理的。
 - ・21ヶ月齢以上の牛のみを検査対象とすると若齢牛の検査成績評価はできなくなる。

総合的評価には多様なデータが必要で、背景を切り離して月齢に関する評価をしたものではない。

(参考) リスク分析とBSE対策

リスク 健康への悪影響が生ずる確率と影響の程度

リスク分析 健康への悪影響の発生を防止・抑制する科学的手法

